

地域社会で育む『輝く女性研究者支援』―大分大学での女性研究者支援事業―

第4回 つながるために必要なこと

大分大学学長補佐(女性研究者支援担当)
女性研究者サポート室長・医学部准教授

松浦 恵子

三回目までの本連載に引き続き、大分大学の取り組みの三つ目、四つ目の柱について紹介いたします。特にこの最終回では、地域とどのように連携しているか、今の取り組みからどう続けて拡げていくのかを中心として、地方大学の特色をお示ししたいと思います。

■地域で育み、地域のモデルに

(7) 地域医療を支えるために

大分という一地方都市では、地域医療の維持が重大なテーマです。そのために女性医師の離職を防ぎ、復職を支援することの大切さは全国的にもいわれている課題です。大分県では「女性医師の会」(現 大分県医師会男女共同参画委員会)が平成十八年に発足し、定期的に集会を持っています。女性研究者サポート室は女性医師の会と連携し、平成二十三年には「女子医学生、研修医等のためのシンポジウム」でサポート室の取り組みを紹

介しました。また、前述した同窓会との連携により、復職のためのメーリングリスト作成を予定しています。医師のみにとどまらず、研究者、看護師の離職を防ぎ復職を支援するため、人材データバンクの利用が役立っています。育児のため離職していた看護学科卒業生が人材データバンクに登録し、研究補助員から研究者あるいは看護師に復職するケースも期待できます。

大分大学には「地域医療学センター」が平成二十二年度に設立しました。地域で働く医師の養成等を行っています。女性研究者サポート室はこの地期医療学センターと連携し、当センターが平成二十三年度より高校生を対象に行っている「高大連携『第一回地域医療を理解するセンター』」でサポート室の取り組みと医師および女性研究者のキャリアについて発表しました。今後も女性医師の復職支援等の面で連携を強めていきたいと考えていま

す。

(8) 次世代のために

オープンキャンパスでは両キャンパスともにサポート室の取り組み紹介コーナーを設け、ポスターや映像を提示しています。また平成二十三年度からは「女性研究者と語ろう」「女性研究者の研究室を覗こう」等のイベントを開催し、高校生や保護者に大分大学の女性研究者の姿を知ってもらう機会を作っています。

さらに理系女子を増やすことを目指し、「大分スーパーサイエンスコンソーシアム」と連携しています。これは県内の高校からな



る組織で、「大分県からノーベル科学者を！」の高い志をもった科学系人材の育成を目指しています。そこで女性研究者によるセミナーに招待したり、共催して女性研究者によるサイエンス講座を開催する予定です。

(9) 自治体等との連携

大分県の男女共同参画では、十年ほど前から大分大学の教員が男女共同参画審議会長に任命されていますが、二十四年度からサポート室長も審議委員として加わります。また、第三次大分県DV対策基本計画策定委員長にも室長が任命され、基本計画の策定に携わりました。さらに、大分県男女共同参画プラザ「アイネス」が毎年実施している男女共同参画ウィーク行事の関係団体活動パネル展コーナーに出展し、ポスター発表による本学の取り組み紹介を行うほか、先輩女性とのトークセッションでは大分大学の女性研究者が二年連続で出演しています。

市町村が企画した、男女共同参画を学ぶイベントでも、大学の取り組みを紹介しました。また、女性が活躍している企業から、大学生にぜひ女性の活躍について、一企業の取り組みを紹介してほしいという依頼もあり、キャリア教育に役立ててもらおうことにしました。

■ひろがるつながる、そのために必要なこと

九州・沖縄地区で文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業をはじめとした女性研究者支援事業に携わる大学等は、Q-weaというネットワークを形成し



ています。九州の Q-women's encouragement/empowerment association (女性がエンカレッジして、またエンパワーメントするための集合体) の Web から名付けられたものです。このネットワークは、平成二十一年から毎年一回、シンポジウムを持ち回りで開催しています。またシンポジウムの他、実務者同士の勉強会、ホームページ、広報誌の他、シンポジウムにおける共同宣言、理事レベルの大学幹部によるパネルディスカッション、そしてその準備やテレビ会議システムの準備など、有形無形の強固な連携を行っており、全国のモデルとなっています。

今年度、大分大学は第四回九州・沖縄アイランド女性研究者シンポジウムの主催大学となります。そのテーマを「つづけること、つながること―九州・沖縄の絆のちから」としました。先行大学に学び、国の助成による支援事業を終えていく大学から、始めていく大

学等へ次々とバトンをつないでいくこと、そして一大学より複数の大学が手を携えることで生まれる相乗効果をどのように作っていくかを議論したいと思っています。

■おわりに

意識改革は一朝一夕に進むものではありません。また、一〇〇%の人間が同じ方向に進むことは難しいものです。成果は目に見えにくく、問題も見えにくいため、課題はたくさんあります。けれども、大分大学では女性研究者支援モデル育成事業をきっかけとして、確かに全学的な男女共同参画が進みました。

これまで気づかれなかった問題点の洗い出しに始まり、体制づくり、周知そして実績をつくっていくさまざまなステップの中で、女性研究者支援のみならず、クルミンマークの取得、働き方の見直しなど職員対象の男女共同参画も進んで参りました。私たちが学んだことを、できるだけ多く大分県内の他の大学や自治体に伝えていくことも大切な責任であると思っています。

大学から地域へ、大分県から九州・沖縄そして全国へという空間軸でつながることに加えて、先輩から後輩へと受け継がれてつながらる時間軸、それら両軸の大切さを感じています。小さな一歩が大きく広がり、長く確かなつながるように、確実に歩いていきたいと思っています。最後に、本誌への連載の機会をいただき、深く感謝申し上げます。

